

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：35403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13315

研究課題名（和文）道徳哲学における共感概念の現象学的立場からの再検討

研究課題名（英文）Reconsideration of the Empathy in Moral Philosophy: From a Phenomenological Point of View

研究代表者

八重樫 徹 (Yaegashi, Toru)

広島工業大学・工学部・准教授

研究者番号：20748884

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：共感を基盤とする現代倫理学の諸理論を現象学の観点から検討しつつ、関連する諸概念（愛、尊敬の尊重、非人間化など）と共感との関係を明確化することに取り組んだ。現代の徳倫理学とそれに対する批判を検討する中で、共感に中心的な役割を与える道徳理論の問題点を整理した。さらに、ポール・ブルームなどの道徳心理学者の議論の検討を通じて、共感と呼ばれる現象に含まれるさまざまな要素を区別し、それらの間の基づけ関係を理解することが倫理学上の問題の解決にとっても重要であること、そうした作業にとって（心理学によるアプローチだけでなく）現象学的アプローチが有効であることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の現象学研究は共感（感情移入）を他者経験の現象学という文脈の中で扱ってきたが、本研究は共感概念の倫理学上の役割を現象学の観点から考察することにより、現象学研究の新たな方向性を見出すとともに、現象学と現代倫理学の新たな接点を示すものである。現象学的倫理学の立場から例えば差別や非人間化といったテーマに取り組む際の基礎を提供するという点でも、本研究の学術的意義は大きい。また、差別や戦争などの問題に関して、共感が重要だということが一般によく言われるが、共感とは何であり、共感が世界をよりよくするとすればどのようにしてか、といったことを問い直す際の手がかりを提供しうる点で、社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：While examining empathy-based theories of contemporary ethics from a phenomenological perspective, we worked to clarify the relationship between various related concepts (love, respect, dehumanization, etc.) and empathy. In examining contemporary virtue ethics and criticisms of it, we identified problems with moral theories that give empathy a central role. Through an examination of the arguments of moral psychologists such as Paul Bloom, we have confirmed that it is important for the solution of ethical problems to distinguish the various elements in empathy-related phenomena and to understand the grounding relationships among them, and that a phenomenological approach is effective for such work.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：共感 現象学 徳倫理学 道徳心理学

## 1. 研究開始当初の背景

現代倫理学において、共感を基盤とする道德哲学は一つの大きな潮流となっている。しかし、そこで用いられる「共感 (empathy)」とそれに関連する「同感 (sympathy)」「ケア」「受容性」「愛」「愛着」などの概念は、論者によって異なる意味で用いられており、これらを重視することでどのような方向性を目指しているのかが、必ずしも明確ではない。そのため、共感をめぐる現代倫理学の議論状況は、一見実り豊かに見えながら、極めて錯綜している。共感概念は、互いに絡み合う現代倫理学の二つの潮流において中心的な役割を演じている。キャロル・ギリガンらにはじまるケアの倫理学と、マイケル・スロートらが展開する新感情主義の倫理学である。だが、これら二つのいずれにおいても、共感概念は一義的に用いられているとはいいがたく、デイヴィッド・ヒュームやアダム・スミスのシンパシーの概念との関係も明らかではない。また、共感概念の源泉の一つであるテオドア・リップスやエトムント・フッサールの「感情移入 (Einfühlung)」の概念との繋がりほぼ無視されている。こうした背景から、共感を基盤とする現代倫理学をめぐる議論を進展させるためには、共感とそれに関連する諸概念が持つ歴史的な文脈に改めて目を向け、それらの概念の道德哲学的な含意を明確化することが必要であると考えられる。そうした作業は同時に、研究代表者が取り組んできたフッサールを中心とする現象学的倫理学の研究を発展させ、現代倫理学における現象学的アプローチの有効性を示すことにもつながると見込まれる。

## 2. 研究の目的

共感を基盤とする道德哲学の錯綜した議論に、現象学的倫理学の立場から新たな光を当て、より生産的な方向性を与えることを目指す。具体的には、近代イギリスにおけるヒュームやスミスの感情主義的道德哲学と、そのアイデアを継承する現代の論者による議論を、エトムント・フッサールの倫理学に依拠する申請者自身の現象学的倫理学の立場から批判することを通じて、他人への共感を含む私たちの感情経験に寄り添いながら、しかも道德の客観性を説明しうるような道德哲学を構想することを目指す。

## 3. 研究の方法

近代道德哲学および現代倫理学の関連文献の調査・検討と、それにもとづく議論構築によって進められる。その際、以下の下位プロジェクトを遂行し、最終的にそれらの成果を統合することによって研究目的を達成する。

- (1) 現象学的倫理学とヒュームおよびスミスの道德哲学の関連性と相違点の解明
- (2) 共感概念を基盤とした現代の道德理論の批判的検討
- (3) 共感の現象学にもとづく新たな道德理論の提示

それぞれについて、近代イギリス哲学および現代の共感論・ケア論を専門とする研究協力者と連携しながら研究を進める。

## 4. 研究成果

研究期間全体を通して、共感を基盤とする現代倫理学の諸理論を現象学の観点から検討しつつ、関連する諸概念 (愛、尊厳の尊重、非人間化など) と共感との関係を明確化することに取り組んだ。英米哲学・倫理学などを背景として共感に関連するテーマに取り組んでいるさまざまな研究者と協力しながら研究を進め、特にヒュームにおける共感と一般的観念の関係、ヒュームからスミスおよび現代倫理学への繋がりに関して検討した。現代倫理学に関しては、道德の基礎を共感に置くタイプの徳倫理学と、それに対する批判を検討する中で、特定の相手に対する共感とより広い範囲に向けられる共感との間の関係、また共感と利他的動機との関係をどのように考えるかが、共感の倫理的含意を説明する上で重要であるという認識を得た。また、近年の徳倫理学および道德心理学の議論を検討し、共感とそれに隣接する概念 (ケア、思いやり、受容性、愛など) との関係を考察した。さらに、ポール・ブルームなどの道德心理学者の議論の検討を通じて、共感と呼ばれる現象にはさまざまなものが含まれており、それらを区別し、それらの間の基づけ関係を理解することが倫理学上の問題の解決にとっても重要であること、そうした作業にとって (心理学によるアプローチだけでなく) 現象学的アプローチが有効であることを確認した。今後は現象学的倫理学の観点から差別や非人間化などのテーマに取り組んでいきたいと考えているが、本研究を通じてそのための基礎を固めることができた。

2018年2月にワークショップ「共感と倫理」、2022年3月にワークショップ「共感と理解」を開催し、現象学のほかにイギリス哲学、フランス哲学、分析哲学、ケアの倫理学、フェミニスト哲学を専門とする研究者を招き、共感とそれに関連する現象の道德的意義について議論を深めるとともに、本研究の成果を報告した。そのほか、2018年の日本倫理学会の主題別討議と同年のヘルシンキ大学での国際ワークショップでも本研究に関連する報告をおこなった。また、本研究に関連する内容の論文と著書を日本語と英語で発表した (詳細は5. 主な発表論文等を参照)。

研究成果の学術的意義と社会的意義について述べる。従来の現象学研究は共感 (感情移入) を

他者経験の現象学という文脈の中で扱ってきたが、本研究は共感概念の倫理学上の役割を現象学の観点から考察することにより、現象学研究の新たな方向性を見出すとともに、現象学と現代倫理学の新たな接点を示すものである。現象学的倫理学の立場から例えば差別や非人間化といったテーマに取り組む際の基礎を提供するという点でも、本研究の学術的意義は大きい。また、差別や戦争などの問題に関して、共感が重要だということが一般によく言われるが、共感とは何であり、共感が世界をよりよくするとすればどのようにしてか、といったことを問い直す際の手がかりを提供しうる点で、社会的意義を有する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 八重樫徹	4. 巻 18
2. 論文標題 道徳的ペシミズムと愛の価値 『現象学の限界問題』第IV部前半を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フッサル研究	6. 最初と最後の頁 76-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 八重樫徹	4. 巻 3
2. 論文標題 エルゼ・フォークトレンダーの愛の現象学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現象学と社会科学	6. 最初と最後の頁 7-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 八重樫徹	4. 巻 35
2. 論文標題 演出された心情と徳：プフェンダー『心情の心理学』を手がかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 八重樫徹
2. 発表標題 エルゼ・フォークトレンダーの愛の現象学
3. 学会等名 日本現象学・社会科学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八重樫徹
2. 発表標題 演出された心情と徳：プフェンダー『心情の心理学』を手がかりに
3. 学会等名 日本現象学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八重樫徹
2. 発表標題 われわれはどのように共感すべきなのか：道徳心理学への現象学的アプローチ
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toru Yaegashi
2. 発表標題 How should we empathize with each other?
3. 学会等名 Helsinki Workshop on Empathy and Emotional Sharing (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八重樫 徹
2. 発表標題 フッサールの倫理学の可能性と射程
3. 学会等名 哲学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 川口茂雄, 越門勝彦, 三宅岳史 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 442
3. 書名 現代フランス哲学入門	

1. 著者名 Thomas Szanto, Hilge Landweer (eds)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 620
3. 書名 The Routledge Handbook of Phenomenology of Emotions	

1. 著者名 Nicholas de Warren / Shigeru Taguchi (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 184
3. 書名 New Phenomenological Studies in Japan	

1. 著者名 Shigeru Taguchi / Andrea Altobrando	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 271
3. 書名 Tetsugaku Companion to Phenomenology and Japanese Philosophy	

1. 著者名 植村 玄輝、八重樫 徹、吉川 孝、富山 豊、森 功次	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 328
3. 書名 ワードマップ 現代現象学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------